Special Program・特別プログラム

ARCHIPELAGO「惑星の庭園」
― 石川直樹写真展

石川直樹　写真家

新しい世界と出会って驚き続けていきたいと、若い頃より世界中を旅し続けてきた石川直樹氏。
最新写真集『ARCHIPELAGO』を通して語る、自然と人間がともに与え合うような日本のあり方。

写真を撮る、既存の日本地図を塗り替える

昨年、写真集『ARCHIPELAGO』を出版しました。タイトルは、群島や多島海という意味です。春に沖縄の那覇にある沖縄県立美術館で、この『ARCHIPELAGO』のすべてを見せる大きな写真展を開催しました。今回は、そのなかから十点を展示しています。選んでくださったのは、僕の大学院の先生だった伊藤俊治さん。今年の山のシューレの総合ディレクターも勤めていらっしゃいます。

いままで撮ってきたシリーズは、世界中の先史時代の壁画を撮った『NEW DEMENSION』、北極圏の村に十年間通って撮影した『PORAL』、そこに住んでいる人たちがそこにある材料で建てたヴァナキュラー建築を撮影した『VERN ACULAR』、富士山に登りながら撮った『Mt.Fuji』などがあります。そして、この『ARCHIPELAGO』が最新作です。

この写真集は日本の北と南に連なる島々を撮影したものです。"日本列島"と言われるように、日本自体が群島なわけですね。北海道島、本州島、四国島、九州島、沖縄島などがあって、南は台湾、フィリピンへと繋がっていく。北は青森から北海道、さらにサハリンからカムチャツカ、アリューシャン列島へ続き、南東アラスカの島々に繋がっていきます。島々の連なりとして、環太平洋の一部である日本という場所をもう一回見直してみようというのが、この『ARCHIPELAGO』のテーマでした。スライドで写真を何点か見ていただきながら、紹介していきます。

いま画面に出てきているのは、鹿児島の桜島が噴火したときの写真です。鹿児島から南下して、最初はトカラ列島です。鹿児島の南にある小さい島々ですね。二年くらい前に、トカラ列島で皆既日食がありました。そのとき有名になったのが悪石島です。不思議な名前の島で、悪石島には一年に一回だけ行われる、仮面を身につけた来訪神ボゼが登場するお祭りがあります。日本の本州で見られる神様とは違って、異形の神ですね。トカラ列島以南の島々の多くは旧暦でお祭りの日が定められていて、来訪神の祭りは、主にお盆の時期に行われます。

悪石島の盆踊りでは、サークル状に歩き続けるという人々の身ぶりが何時間も続きます。盆踊りは元々、遠くの見えない場所からやってくるご先祖様の霊を迎えるための踊りですから、形骸化した都市の盆踊りとは異なっています。長い盆踊りが終わると、ようやくこのボゼが登場します。こうした儀礼が南の島には多く残されています。

この辺りの写真から奄美大島に入ります。トカラの南には奄美群島があります。奄美の名瀬という町の郊外で行われたイノシシ狩りに同行して写真を撮りました。

この『ARCHIPELAGO』のシリーズには、狩猟のシーンが何度もでてきます。僕は食べ物を自分で得ることに興味があって、最近は狩猟や農業の風景を取材しながら全国を回っています。このときはほぼ同時期に北のアイヌの人たちの狩猟などにも同行していました。

奄美からさらに南にいくと徳之島があります。徳之島には日本では珍しい線刻画が残されています。この絵に関しては、まだそんなに研究が進んでいません。

徳之島に空港はありますけれど、このときはフェリーに乗っていき、ときどき小さな飛行機で島々の上を飛んで空撮しました。

徳之島の南には沖永良部島があります。島のあちこちに水路が張り巡らされていて、これは他の島にはあまり見られません。暗い川と書いて"くらごう"と読ませる水路がいくつもあって、その出口が村の拝所になっていたりします。この写真は沖永良部島のお墓ですが、骨壺が剥き出しになっていました。

こういった島々をたどっていくと、見慣れた日本地図が変化していって、やがて国境線が滲みだして曖昧になり、線が揺らいでいくような感覚があります。台湾やフィリピンへ渡っていくと、その繋がりを実感したり。あるいは、鹿児島から北に北上していくと、同じ日本でも断絶があるのを感じることもあります。既存の世界地図を塗り替えるような作業は、これまで僕がずっとやってきたことですし、これからもそうやって自分なりの地図を描いていきたいと思っています。

お祭りに惹かれて、世界の島を巡る旅を続ける

このあたりから沖縄本島に入ります。沖縄はとても思い入れの深い場所で、もう何十回と通っています。いつか東京以外の地に移住するとしたら、沖縄に住みたいなと思っているほどです。

沖縄には平敷兼七さんという写真家がいらして、いまスライドに映っているこの方ですけど、去年お亡くなりになりました。僕にとっては大きな存在で、彼から受けた影響は計り知れません。こうやって『ARCHIPELAGO』の展示や本をまとめられるのは、平敷さんのおかげだと思っています。彼の遺作として『山羊の肺』という素晴らしい写真集が出ています。機会があったらぜひ皆さんにも見てもらいたいと思います。

沖縄本島から、さらに南にいくと宮古群島があります。宮古島には有名なパーントゥというお祭りがあります。井戸の底に堆積した泥を被った三人のパーントゥが一年に一回出てきて、出会った人に泥をつけて回ります。パーントゥに泥をつけられると、その一年を無病息災で過ごせるといわれています。

これは、西表島です。八重山では"ミルク"という白いお面をつけた人物が出てきます。海の彼方からやって来た人たちで、ミルクという名は弥勒菩薩からきているはずです。

僕はこうした祭祀儀礼をたどって、いま『ARCHIPELAGO』の続編をつくっています。このあいだまでフィリピンにいっていたんですが、今後、シンガポール、マレーシア、インドネシアやその周辺の島々を旅しようかなと思っています。

鳩間島にもミルクがいます。鳩間島は八重山群島のなかで最も小さい島です。その鳩間島にある学校の倉庫のような場所の片隅に、ミルクの仮面が置いてありました。

八重山では青年がそのミルクの仮面を被る前に、酒をしこたま飲みます。酔っぱらって、行進をするときには千鳥足になっています。その左右を子どもが、ワキを抱えてミルクが転ばないようにするわけです。

千鳥足だったり、身体が不自由な人は境界を越えやすい。ミルクに変身する人が酒を飲んでから仮面をかぶるのは、たんにその祭りの雰囲気でそうなっているのではなくて、儀礼の作法の一部なんだとぼくは勝手に思っています。

最後は台湾です。台湾の台北は大都市ですけれど、台南、台東にいくと、先住民の人たちが増えていき、沖縄と同じ豊年祭が行われています。日本語を話せる人も多いですね。

この台湾の周辺からフィリピンに向かっていく東南アジアの島々は、昔はスンダランドという一つの大陸でした。スンダランドは太古、海面が上昇する以前にあった広大な陸地であり、人類揺藍の地でもあります。いまはそこが多島海になっていて、それがフィリピンやインドネシアやマレーシアですね。このスンダランドの先にはポリネシアがあります。

台湾には金門島という島があります。金門島は中国のすぐ目の前にある小さな島で、かつては中国と台湾による激戦地でした。海岸には戦車などの上陸を阻止するような杭が立っていて、他にもトーチカなどといった戦争の名残が随所にたくさん残っています。

金門島から中国大陸はほんの二、三キロしか離れてなくて、泳いでも渡れるぐらいの近さですが国交がありません。僕はこの島の岸辺に立って中国大陸を見渡しながら、本当に荘然としました。中国に入りたかったんだけれども入れなくて、金門島でこの旅を終えることになりました。

やっぱり、大陸というのはすごく大きな場所です。大陸から島を見るのではなくて、島から大陸を見返す、見つめ返すという作業をしてきて、それが図らずも、中国大陸の目前である金門島で終わったんです。

南から北へ、山から海へ、島から山へ

『ARCHIPELAGO』では、前半は南に向かう旅が収録されていて、後半からは北に向かっていく旅になっていきます。日本列島のことを考えたときに、南の繋がりだけではなく、北の方の繋がりも同時に見て、島の連なりから、もう一回こうした地域を見直してみたいと思ったんですね。北の方の島々では、北海道からさらに北のサハリン島にも真冬の時期にいって、撮影をしてきました。

この写真には「カムイエカシチャシ」という看板が写っています。ここはアイヌの人たちが大切にしている場所です。カムイは神、エカシはおじいさん、チャシは砦という意味ですね。神様のおじいさんが住む砦、みたいな意味になると思います。この近くに洞窟があります。これがアイヌの人々にとっては非常に重要な場所です。砂に埋もれていたのですが、発掘作業が行われた直後にぼくは写真を撮りにいきました。あの世への入り口と言われている洞窟です。

この次に出てくるのが、有珠山です。昭和新山とも呼ばれているように、昭和になってから噴火した山です。これを見ていると、山は地上から地殻変動で飛び出た大地の一部だというのが、よくわかると思います。

この夏、瀬戸内芸術祭で僕が展示した作品のテーマが『島は、山』というものでした。島は海から飛び出した山ではないか。昔、海がなかったときは、その島は山だったわけですから。いま、山と呼ばれている場所は麓から、つまり山の周りから人が住み始めていきました。島も同じです。海岸から人が住んでいく。つまり島の生活、島に人が住み始める過程と山に人が住み始める過程はよく似ています。民俗学者の折口信夫が『海やまのあひだ』という歌集を残しました。宮本常一や柳田國男も島と山の共通性みたいなものにその著作で触れています。僕はそこからヒントを得て、空撮などをしながら『島は、山』ということについて、いま考えている最中です。

石川直樹(いしかわ なおき)
写真家。1977年生まれ。多摩美術大学芸術人類学研究所特別研究員。2000年、Pole to Ploeプロジェクトに参加して北極から南極を人力踏破。2001年、七大陸最高峰登頂を達成。人類学、民俗学などの領域に関心をもち、行為の経験としての移動、旅などをテーマに作品を発表。写真集のほかに『この地球を受け継ぐ者へ』など、著書多数。